

保育者養成課程における絵本理解を

深める教育方法の実践

——絵の分析と絵本作家による講演を中心に——

A Practice of the Educational Method to Deepen

Understanding of Picture Books in the Nursery

Teacher Training Course: Focusing on Picture Analysis

and the Lecture by a Picture Book Writer

伊藤 美和子

Miwako Ito

研究の背景と目的

背景 絵本の読み聞かせの効用が広く認識されるようになった現在、出版不況の中でも絵本の出版部数は堅調である¹⁾。家庭でも保育の場でも、祖父母の時代から読み継がれてきたいわゆる名作絵本の他、新刊絵本に乳幼児が触れる機会が多くなった。今の子どもたちが直面する生活環境を反映した新刊絵本の増加は歓迎するべきであるが、新旧を含めると膨大な数となる絵本の中から、保育者が園で出会う乳幼児に最適な絵本を選ぶことは簡単ではない。選択肢が広がった分、優れた絵本を選ぶ力が保育者に必要になったといえる。

絵本を公正に評価するためには、児童文学、絵の鑑賞法、絵本の歴史等について学ぶ必要がある。瀬田（1985）やニコラエヴァ・スコット（2011）のような優れた専門書もあるが^{2) 3)}、カリキュラムが過密な保育者養成課程において扱うことは難しい。絵本の選書力向上を目指し、絵本理解を深めるような教育方法を構築し、実践する必要がある。

先行研究 保育者養成校での絵本教育についての研究は多数ある。選書力に焦点を

あてた先行研究では、中村・三浦・諏訪(2005)と松尾(2016)が保育者養成校の学生に100冊レベルの絵本を読み記録をつけてもらう方法を実施している^{4) 5)}。多読の効果は一定程度、確認されたが、一方で中村ら(2005)が示したように、課題達成のために複数の作品を速読することになり、絵本本来の良さを味わえない可能性がある⁴⁾。こうした多読とは反対に、少数の作品と向き合う授業も行われている。三好(2017)は、学生が実習で読んだ絵本を実習後に省察的に読み直すことの効果を示している⁶⁾。杉本(2016)は、教員が絵本の読み聞かせを授業で行い、学生が読み聞かせを聴く機会を設けることで、感性的な面で絵本理解を深める試みをしている⁷⁾。

しかしこれら先行研究では学生が主体的に、その作品の本質や価値を解明するために作品の構造を分析し、言語化する手法は取られていない。絵本を評価するためには、適切な方法論に基づき、作品を観察し、その構造内部にまで切り込んで分析し、その結果を言語によって明確化する必要がある。

先行研究と課題を踏まえ筆者は、学生が分析の基礎的手順に基づき、対話をしながら、絵本の絵や文章を分析し、作品の主題に迫る対話的な鑑賞方法を試みた。将来、保育者になる学生が、今後、手にする新刊絵本を評価できるようになるためには、絵本を感性的に味わう姿勢と公正に分析する技術を身につけ、その作品の本質的価値を自分で発見し、絵本について保育者間で論じ、理解を深める方法を身に付けることが重要だからである。

上記の対話的鑑賞の具体的方法として、①翻訳を通した言語的表現の考察、②絵の対話的分析、③絵本の製作過程の理解、④評価の言語化、がある。①と④は別の機会に述べることとし、本研究は②と③を扱う^{注1)}。以下、絵の対話的分析、及び、絵本の製作過程の理解を主題にした授業が、学生の絵本理解を深めるかを確認し、絵本の選書力の向上につながるかを考察する。

方法

研究協力者 4年制の保育者養成課程在籍する学生61名である。

実施時期 2019年12月に実施した。

倫理的配慮 対象者には本研究の目的と方法、協力は自由意志であり、回答内容による不利益はないことを口頭で説明した。同意が得られた学生に授業時間外でのアンケートへの記入を依頼した。

方法1：模擬保育形式の「絵の分析」

本研究では複数ある絵の分析方法のうち、三森(2002)が提案する方法を用いた⁸⁾。この手法は大人と子どもが対話的に絵を読み解く形式をとっているため、子どもと関

わる保育者養成課程の学生に適しているからである。ここで三森（2002）に従い、絵の分析の概要を説明する⁸⁾。絵の分析とは、子どもの論理的言語表現を育成することを目的にした言語技術教育方法の一つである。大人と複数の子どもが対話しながら、絵を分析し、絵の主題を読み解いていく。初めに場所や主人公等、視覚的に明確な事項を確認してから、背景、小物、衣類、表情等の細部に注目する。得られた情報から人物の内面、絵に描かれた場面の前に起こった出来事、または後に予想される展開など、絵に描かれていない物語を想像することで、絵の主題に迫る。絵という具体物に依拠しながら、自分の考えを言語化し、答えを探っていくので、観察力や分析力、論理的な言語表現力の育成が期待できる。

本研究ではこの方法を基本とし、授業の一環として以下の手順で絵の分析を行った。まず教員が学生の発言を引き出しながら、1枚の絵の分析を例として行った。その後、学生たちは教員の指示に従い、5～6名ずつの班に分かれ、三森（2002）付録の口絵（たしろちさと作）を使用し⁸⁾、「保育者と5歳児クラスの子どもが対話をしながら、絵を読み解く保育場面」を想定したシナリオを作った。その後、各班が順に教室の前方で模擬保育形式での絵の分析を行い、聴講する学生がそれを評価した。

調査方法・手順 絵の分析の模擬保育発表後、学生に自由記述形式で回答してもらった。質問文は、「絵の分析をとおして気が付いたことを記述してください」である。学生の手書きの回答を電子化し、テキスト分析を行った^{注2)}。回答文の単語の使用頻度と共起関係から学生が何に注目したかを調べた。同時に学生の回答を読み解き、テキスト分析の結果と併せて学生の学びを考察した。

方法2：絵本作家の講演による絵本製作過程の理解

絵の分析終了後、学生は絵の分析で使用した口絵の作者たしろちさと氏による講演を聴講した。講演のテーマは絵本の製作過程で、所要時間は30分程度であった。講演終了後、希望する学生は、たしろ氏の絵本の原画を鑑賞した。

回答文の解釈の鍵となるため、たしろ氏について簡単に紹介する。たしろ氏は2001年に絵本作家としてデビューして以来、動物や虫、こどもを主人公とした絵本を多数、世に送り出している。あたたかみのある画風とユーモアの利いたその作品は海外でも広く支持され、英・仏・伊・露・中国語等に翻訳され出版されている。『ぼくうまれるよ』⁹⁾は第21回ブラティスラヴァ世界絵本原画展で入選し、『5ひきのすてきなねずみ ひっこしだいさくせん』¹⁰⁾は第16回日本絵本賞を受賞した。

たしろ氏は、絵本の製作にあたり本物を自分の目で観察し、本質を十分、掴みとってから独自の画風で描いていく。講演では、カバの親子をテーマにした絵本製作のために、アフリカに野生のカバ親子を見に行行った話や、虫と幼児が登場する絵本製作のために、幼稚園の遠足に同行し、幼児がダンゴ虫をどう手にするのか観察してから描

いたというエピソードを紹介してくれた。

調査方法・手順 研究協力者は方法 1 と同じである。講演終了後、学生にアンケート用紙を配布し、授業時間外に回答してもらい、講演の 1 週間後に回収した。質問文は、「たしろちさとさんの講演についての感想を自由に書いてください」である。

結果

結果 1：模擬保育形式の「絵の分析」

学生の回答文における単語の使用頻度と単語の共起関係を分析し、回答文全体と照合させ、学生が何に注目し、何を学んだのか傾向を探った。

学生の回答文中の単語の出現回数を品詞別に整理したものが表 1 である。頻度が高い単語のうち、名詞の「絵」、「分析」、「子ども」とその類義、「保育者」とその類語、動詞の「思う」、「感じる」、「分かる」等については枠を灰色にした。これらの語は、「絵の分析を通して、子どもは～することが分かった」、「保育者は～すべきと思った」のような文に登場する。調査の性質上、必然的に多用される表現であり、頻度の高さが回答における単語の重要度と必ずしも一致しない。これらの語は回答の骨格であり、それ以外の白枠内の単語が今回の調査の特色、いわば肉となる部分と解釈できる。

白枠内の単語のうち、頻度が高いのは、意見、想像・想像力、大切、絵本、登場人物、気持ち、できる、見る、違う、描く、膨らむ、広げる、様々な、細かい、面白い、深い、といった語である。

さらに回答の傾向を把握するため単語の共起関係を調べた。共起とは一文における単語のペアの出現のことである。回答全体の単語の共起関係をテキスト分析ソフトを用いて図にしたのが図 1 である。出現数の多い単語ほど、その語を示す円が大きく、また共起の程度が強いほど、単語同士が太い線で結ばれている。本研究では、共起関係を内容により A、B、C、D の 4 つのグループに分類した。各グループの単語の使用頻度と共起関係を、回答文一つ一つと照らし合わせることで、学生の学びには、大きく 4 つの傾向があることが分かった。以下でこの 4 つの傾向について説明する。

A) このグループは絵の分析についての全体的感想を表している。「絵」、「分析」、「気付く」、「できる」という単語が多いことから裏付けられる。「1 枚」の「絵」を「分析」することによって、「細かい」ところまで「見る」ことが「できた」、「気付く」ことが「できた」という回答文が反映されている。回答の冒頭にこのような記述が多かった。

A に関連する学生の回答を挙げる。

ア) 絵本を読むことはあっても、その中の 1 頁に注目したことはなかったので、新たな発見がいっぱいあり、驚きました。

表 1 回答文における単語の使用頻度

順位	名 詞	回数	順位	動 詞	回数	順位	形容詞他	回数
1	絵	139	1	思う	71	1	様々な・ 色々な	32
2	子ども・ 子どもたち	100	2	できる	48	2	大切な	25
3	保育者・ 教師・大人	41	3	感じる	35	3	細かい	21
4	分析	34	4	考える	31	4	面白い	14
5	意見	31	5	分かる	29	5	楽しい	12
5	想像・想像力	31	6	気付く	29	6	深い	8
7	1 枚	27	7	見る・見える	30	7	難しい	6
8	大切	25	8	違う・異なる	17	7	良い	6
9	絵本	20	9	描く	16	9	何気ない	4
10	登場人物	17	10	読む	15	10	詳しい	3
11	気持ち・心情	17	10	膨らむ・膨ら みやすくなる	15	10	悲しい	3
12	発言・声	15	12	広が(げ)る	10			
13	内容	13	12	知る	10			
14	季節	12	14	聞く	9			
14	部分	12	14	言う	9			
16	答え・正解	12	16	読み取る	8			
17	視点・見方	11	16	受け止める	8			
17	物	10	16	伝える	8			
19	発見	8	19	繰り返す	7			
20	共感	7	20	まとめる	6			

表の注釈：「形容詞等」とは形容詞と形容動詞、副詞等のことである。「いろいろ」、「色いろ」、「さまざま」、「様々」等は、電子テキスト化の際、全て漢字表記に統一した。「子ども」と「子どもたち」、「意見」と「声」、「見る」と「見える」等、回答における意味内容が同一とみなせる単語については、一つの枠に入れた。

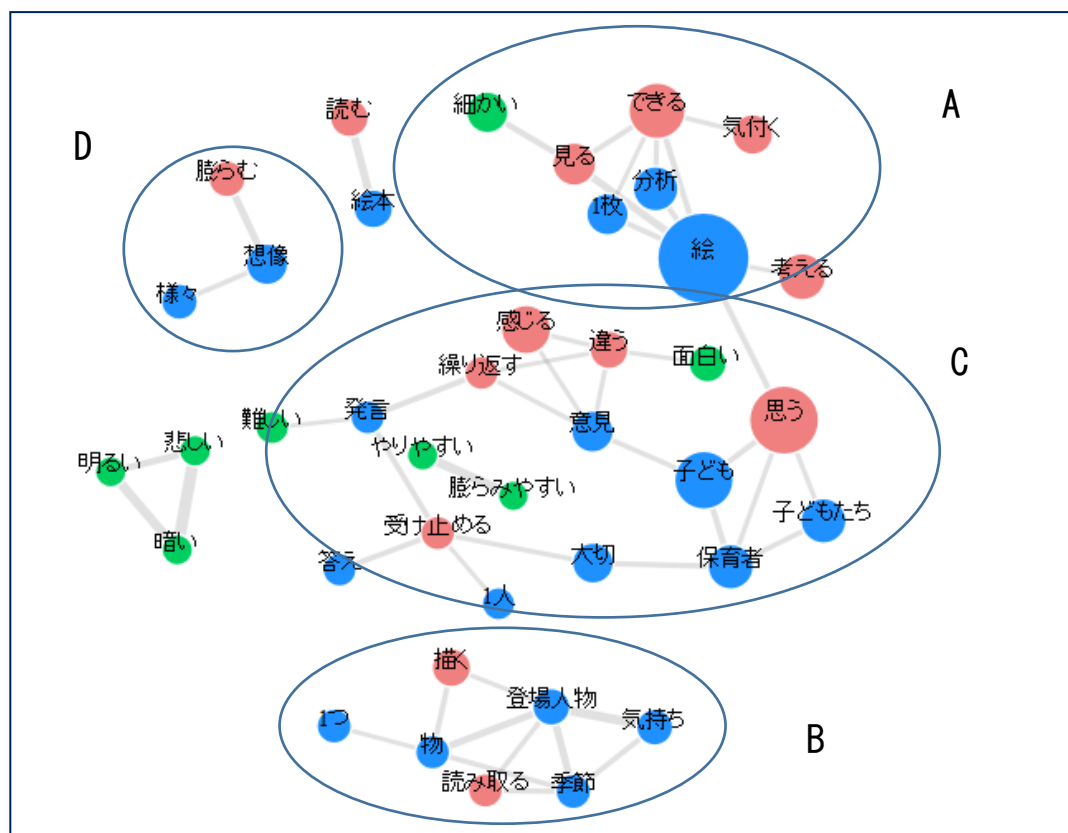


図 1 回答文における単語の共起関係

イ) 絵を細かいところまで見ていなかったの、細かいところまで見ると、すごく面白かったです。

ウ) 題名、内容を知らずに 1 枚の絵を見たときに、どのようなことが描かれているのか、細かい所まで注目しました。今まで絵本の細部までじっくりとみたことが無かったので、絵本を描く人は、1 枚の絵で見た人がどのように想像を膨らませることができるのか考え、こだわっているのだと気付きました。

学生が絵の分析を初めて体験し、1 枚の絵にじっくりと向き合うことによる気づきが予想外に多かったことが伝わってくる。

B) このグループは実際の絵の分析過程で気付いたことを表している。B は A を補足している部分である。絵の分析過程で絵に「描」かれている「季節」、「1 つ」ひとつの「物」や「登場人物」の「気持ち」を「読み取る」ことができたという回答が反映されている。

B に関連する学生の回答を挙げる。

エ) 1枚いちまいの絵、絵の細かい部分に作者の思いがしっかりと込められていることに気付いた。小さな登場人物にもそれぞれ意図を持った動きをしていたり、置いてある物1つにおいても、そのストーリーを表す大切な働きをしていることが分かった。

オ) ただ絵をみるだけでなく、1つひとつ細かい部分で、登場人物の様子や仕草を読み取ったり、どのような物がるか、季節や時間はいつか、などを味わった上で、もう一度、全体を見ることで、より絵の内容が深く伝わると感じた。

学生たちは絵の細部までよく観察することにより、1つひとつのモチーフに意味があり、それを読み取ることで絵の内容を深く理解できるようになっていることが分かる。

C) このグループは、保育者としての考察を表している。子どもの反応に着目し、自分が保育者として子どもをどのように理解し、導いていくべきか、検討している箇所である。そのためか、「子ども」、「子どもたち」、学生・保育者が「思う」という単語の使用頻度が高く、他のグループより多くの単語と品詞を含み、共起関係が複雑である。「保育者」が「子ども」「1人」ひとりの発言を「受け止める」ことは「大切」であること、「子どもたち」のそれぞれ「違う」「意見」を聞くのは「面白い」ことであるが、予想外の内容の「子ども」の「発言」をまとめるのは「難しい」という回答が反映されている。

Cに関連する学生の回答を挙げる。以下、〔〕内は著者による補足。

カ) 絵を見て、この子〔登場人物〕が今、何を見ているか、今、何を考えているのか、どこなのか、季節、時間はいつなのか、考えてみると、色々な意見ができて、色々な考え方ができて、面白いし、想像力が膨らむので、子どもたちにとっては楽しいのではないかと思った。

キ) 1枚の絵にも色々な情報や思いが詰まっていて、それを子どもたちとの話の中で、広げていったり、深めていくのは、保育者の進め方次第だと感じた。

ク) 最終的に行き着いた答えが、正解でなかったとしても、皆で話して納得して、1つの答えをだすことが大切だと感じた。

ケ) 子どもの答えや発言に対して、1人ひとりの意見を受け止めて、共有していくのが大切だと思いました。

コ) 子どもたちの想像を膨らませるような声かけや話のつながりをすることが大切だと思いました。

サ) 子どもたちからその時にどのような発言が出てくるのか、分からないので、それに対して保育者はどう答えるのか、どうまとめるのか難しいと感じました。

学生たちは、絵の分析は、保育者と子どもたちが対話をしながら、想像力を「膨らませ、楽しむ活動であり、保育者として子どもたちをサポートする姿勢と技術が必要だ

と認識していることが伺える。

D) このグループは、BとCから派生した部分である。絵の分析を実際に行うことで、「想像」が「膨ら」み、「様々」なことに、自分自身も気が付いたし、子ども自身もそうなってほしいという回答を反映している。

Dに関連する回答は上記の力、ケが当てはまる。他に以下の回答を記載しておく。

シ) 1枚の何気ない絵から、多くの想像を膨らませることができるとともに、様々な視点から考えることができると思いました。

結果2：絵本作家の講演による絵本製作過程の理解

学生が書いた講演についての感想文においては使用単語や共起関係が分散的で、テキスト分析では特徴が明確にならなかった。そこで内容ごとに文章を整理し、学生の学びの特徴を読み取れるようにした。その結果、以下のような傾向が明らかになった。

まず、絵本製作過程に関連する感想を挙げる。

ス) 絵本を完成させるまで3年もの月日がかかることを知って、とても驚きました。

普段、当たり前のようにみている絵本は、作者のとてつもない努力からできていることがわかりました。

セ) 絵本を描く前にいろんな所へ行って研究したり、話し合いを重ねることでやっと1冊、完成するのだと分かりました。

学生たちは、絵本は簡単に作れるものという認識があったようであるが、講演を聴講して、絵本の製作には通常、3年程度かかると知り、素直に驚きを表していた。作家は、編集者と共に企画・取材を重ね、方向性が決まってから製作し、修正を加えながら原画と文を完成さる。さらに印刷実務者と共に絵本の紙質と大きさを決め、印刷後の仕上がりを確認し、調整を繰り返し、出版に至るのである。

次に、絵本と実世界に関連する学生の感想を挙げる。

ソ) 今まで、絵本は実際にはあり得ないこと、創造物として作られていると思っていました。カバの親子が見つめ合うことはありえないから、描けなかったというお話をきいて、取材や観察を重ね、真実を書いていることを初めて知り、絵本製作の奥深さを改めて感じました。

タ) ネットで写真をみて絵を描くのではなく、実物を生で見て、観察して描いているとおっしゃっていて、絵本と本気で向き合っていることが伝わってきました。

学生たちは、絵本は想像して描くものと思っていた。しかし実際には、作家は描こうとする事物についての正しい知識を得、十分に観察し、時には専門家から助言をもらい、取材を経て、製作されるものであることを学んだ。予想外のことで驚いていた。

また、以下に示すように、学生の回答の結びには、授業を通して絵本の製作過程について詳しく知ったことで、絵本の価値を再認識したという記述が多かった。

チ) 実際に本物を見ることで忠実に絵本の中に再現され、〔中略〕子どもたちが「本物にある世界」を感じられるのだと思った。

ツ) 1冊つくるためにたくさんの時間をかけることで、素晴らしい絵本ができるんだなと思いました。

講演をとおして学生たちは、絵本は想像の産物でなく実世界を基礎にしていること、その製作に複数の人々が多大な時間と労力を費やしていること、その結果、優れた絵本が生まれるということに気付いたようである。

考察

本研究では、保育者養成校での保育内容の授業において、絵の分析を対話的に行い、絵本製作過程について理解することで学生はどのようなことを学ぶかを明らかにした。得られた結果から、1つ目として、絵の分析の効果が確認できた。学生たちは、対話をしながら分析的に絵にアプローチすることで、1枚の絵から、一見しただけでは認識できない時間的・空間的設定、登場人物の心情、秘められた物語などを読み解くことができることを学んだ。2つ目として、学生の保育者として自覚が確認できた。学生たちは、「想像力を働かせる」、「発見したり、考えたことを言語化する」といった絵の分析の保育面での効果を理解した上で、子どもたちの多様な意見のまとめ方に注意を払っていた。3つ目として、学生たちは絵本作家の講演を聴き、複数の関係者が長時間尽力することにより優れた絵本が誕生することを認識するに至った。絵本製作過程の理解と絵の分析という授業内容と方法が、学生に新たな気づきの機会を与え、絵本理解を深めたといえよう。

しかし本研究で行った方法が学生の絵本の選書力の向上に有効であったとまではいえない。その理由を2つ、挙げておく。第1の理由は、絵の分析を模擬保育形式で行ったことで、子どもとの対話に注意が注がれ、絵そのものに対する注目度が相対的に低くなったからである。絵本の選書力向上を目標とするなら、学生同士で純粋に絵の分析を行った方が効果的であつただろう。第2の理由は「絵本」の絵を分析の対象にしなかったことである。絵本の選書力をつけるには、絵の分析により基礎的知識をつけた後、玉置・灰島・川端（2013）の試みのように、実際に出版されている絵本の絵を分析し¹¹⁾、保育者の視点で学生たちが検討する学習過程が必要だろう。

今後、上記の2点を考慮にいれ、授業方法を改善し、将来保育者になる学生の絵本の選書力向上に取り組みたい。そして、その結果として、保育の場に1冊でも多く、心を豊かにしてくれる絵本が届けられることを願っている。

注

注 1) 本研究の一部は 2020 年日本保育学会第 73 大会において発表している。

注 2) テキスト分析には「ユーザーローカル テキストマイニングツール」を利用した。
Web サイトは <https://textmining.userlocal.jp/> (2020 年 10 月 2 日現在) である。

引用文献

- 1) 朝日新聞 2019 年 7 月 3 日付夕刊 2 面.
- 2) 瀬田貞二. (1985). *絵本論：瀬田貞二 子どもの本評論集*. 福音館書店.
- 3) Nikolajeva, M., & Scott, (2011). *絵本の力学* (川端有子・南隆太, 訳). 玉川大学出版部. (Nikolajeva, M., & Scott, (2001). *How Picturebooks Work*. Routledge.
- 4) 中村由紀子・三浦正雄・諏訪英広. (2005). 保育士養成課程における「絵本 100 冊読み」実践の成果と課題: A 短期大学幼児教育学科卒業生に対する質問紙調査をもとにして. *山陽学園短期大学紀要*, **36**, 61-74.
- 5) 松尾裕美. (2016). 保育者を目指す学生の絵本への認識. *福岡女子短期大紀要*, **81**, 1-8.
- 6) 三好伸子. (2017). 学生の姿から考察する絵本の効果：保育者養成校授業でどのように使用するべきか. *甲南女子大学研究紀要*, **53**, 89-96.
- 7) 杉本真理子 (2016). 大学生と「絵本」を読む (その 1) : ことばを大切に、互いの交流から「学び」を深める授業の試み. *帝京大学文学部教育学科紀要*, **33**, 49-74.
- 8) 三森ゆりか. (2002). *絵本で育てる情報分析力*. 一声社.
- 9) たしろちさと. (2007). *ぼくうまれるよ*. アリス館.
- 10) たしろちさと. (2010). *5 ひきのすてきなねずみ ひっこしだいさくせん*. ほるぷ出版.
- 11) 玉置友子・灰島かり・川端有子. (2013). 『とん ことり』をドゥーナンの手法で読む. Doonan, J., (1993). *絵本の絵を読む* (玉置友子・灰島かり・川端有子, 訳). 玉川大学出版部. (Doonan, J., (1993). *Looking at Pictures in Picture Books*. Thimble Press.)

謝辞

本研究の一部は、京都橘大学外部講師招聘事業を利用し、実施されました。同大学の関係者と学生の皆様、絵本作家たしろちさと氏に深い感謝の意を表します。